私篇　『続・のだめ』　初共演　I

瓢六玉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
私篇　『続・のだめ』　初共演　Ｉ

【Ｎコード】
Ｎ０８８２Ｌ

【作者名】
瓢六玉

【あらすじ】
のだめと千秋の共演がついに叶った。

のだめと千秋の初共演は、ライジング・スターとの日本公演で、と決定した。
曲はチャイコンとラフコンというロシアの二大曲である。
母校のコンサート・ホールとのだめの故郷・大川と東京サントリー・ホールと大阪シンフォニー・ホールの４回公演である。
エリーゼはこれをしっかり録音し、ベストテイクをシュトレーゼマン事務所からＣＤとＤＶＤライヴ盤として出そうという目論でいた。
独奏者・指揮者ともに専属アーティストだから、他レーベルにばかり儲けさせる手はなかった。

のだめと千秋は、初めてふたり揃って成田に降りた。
そして、その足でまずは母校に挨拶に行くことにした。

「千秋先輩。私たちのこと先生たち覚えているでしょうかね…」
千秋は
（バカかこいつ…）
という目でのだめを睨んだ。
「おまえ、シュトレーゼマンとの共演で、どんだけ有名になったと思ってるんだ。
あのときのＣＤとＤＶＤ、ユーチューブとで、もう全世界の人間がおまえのこと知っているんだぞ」
「ムキーッ。ですかねー…」
「あたりまえだ、バカ。
おまえに比べたら、俺のほうがよっぽど無名指揮者だ」
「そうなんですか？」
「キーッ。それ嫌味だぞ」

千秋に首を締められ、のだめは白目をむいた。
タクシーの運転手が派手な痴話喧嘩をバックミラーでちらちら盗み見していた。

「それから、サン・マロのライヴも馬鹿売れしただろ」
「はい…。のだめ、儲かったです」
「チッ…。印税、たんまり入ったんだろう」
「はい。税金で一億円も払いましたけど…」
「い、いち…」
千秋は縁のない金銭単位がのだめの口からまるで千円とおなじように言われるのを聞いて呆れたような気分になった。
「おまえ、大川の両親とか家族になんか送ってやったのか？」
「はい。ちゃんと送りましたよ。サンマロのお土産屋さんで買ったものとか…」
「…。それって…」
千秋はあんぐりと口を開いて、やがて溜め息をもらした。
そして、
「ま、俺には関係ないけど…」
とひとり呟いた。

タクシーが校門をくぐると驚いた。
いつ、どこで、どう情報が伝わったのか、ほぼ全校生に近い数の学生たちが、本館のアプローチ付近に集まって、ニ大スターの到着を待ちわびていて、車中にその顔を認めるとキャーという一大歓声がわき起こった。
校内の掲示板や壁の至る所に、のだめと千秋がアップになった特大ポスターが貼ってあり、それは二人にとって気恥ずかしいくらいであった。
まさに、故郷に錦を飾る、とはこのことだった。

タクシーを降りると、ふたりとも触りまくられ、もみくちゃにされながらも、ようやく理事長やハリセン、谷岡らの立つところまでたどりついて、再会と祝福の握手を交わしあった。
「おめでとう。千秋君。野田さん」
理事長は破顔一笑して挨拶した。
「野田。魂消たで。
たいしたやっちゃ…」
ハリセンが畏れいったという表情で笑みを送った。
「ふたりとも、よかったね」
とやさしい笑顔で谷岡が祝福した。
恩師の思いもよらぬ暖かな言葉に、ふたりともジンときた。
そして
(帰ってきて、よかった…)
と揃ってそう思った。

帰国して、ライジングスターのメンバーたちとも再会を喜びながらも、すぐにリハに入った。
理事長が大学ホールを練習用にと無償提供してくれた。
連日、多くの学生たちが勉強のためリハを見学にきた。
のだめはフランスでずっと千秋と譜読みをしてきたので、仕上がりはスムースだった。
それは「阿吽の呼吸」のような、痒い所に手が届くような、まさにピタリと息の合った演奏だった。

いよいよ、母校での本番を迎えた。この日、学生は学生証の提示で無料入場できたが、一般客は数少ないチケットを入手するのに困難をきたした。
サイントリー・ホールとシンフォニー・ホールの分も発売数分で完売してしまっていた。
どうしても聴きたい客は最終日の大川のチケットを入手する以外

なかった。

真紅のドレスでのだめが千秋を後ろに従えて舞台に登場した。
テレビカメラもふたりの動きを追ってカメラをパンさせている。
盛大な拍手と一部から
「千秋せんぱ～い！」
という甲高い嬌声があがった。
「のだめちゃ～ん！」
という聞き覚えのある裏軒の親父の声もそれに混じっていた。
オケは全員が足を鳴らして二人を迎えた。
いよいよ日本公演、そしてふたりの共演の幕開けである。

客席では評論家の佐久間が早くも自らのポエム世界に没入していた。
「あー。千秋くん。
幾多の万難を排して、今、神々に祝福されし君よ。
汝の紡ぎし天上の音楽は、神々をして陶酔させることだろう」
となりで河野が言った
「佐久間さん。きょうの主役はのだめちゃんですよ…」
佐久間は陶酔から醒めて
「わかってますよ…」
と憮然と言った。

のだめは素っ気ないほどペコリとお辞儀するとスタインウェイの前にどしりと座った。
そして、千秋との十分なアイ・コンタクトと確認の頷きのあとで、タクトがさっと振り下ろされた。
ホルンの短いファンファーレが高らかに響いた。
そして、のだめの力強い上昇和音がホールの隅々まで響き渡った。
一瞬にしてロシアの広大な大地が人々の脳裏に描かれるようだっ

た。
佐久間は早くも打ちのめされたようにウットリと目を閉じて酔っていた。
ハリセンは、
（あの野田が…ここまで…）
と、その成長ぶりと進化に驚きながらも、コンパトのオクレール師の偉大さと彼女自身の才能に、あらためて敬服せざるを得ない思いだった。
そして、自らもその一端に関われたという誇りもあり、どこか嬉しかった。

演奏はふたりの個性が激しくぶつかりあい、清良ほか龍太郎、真澄たちライジングのオケもそれにヴィヴィッドに応えた。
ロマンティックな緩徐楽章の二楽章で聴衆を魅了したあと、息もつかせぬくらい速いパッセージで三楽章が疾風怒涛のように演奏された。
のだめは単にサーカス的な速弾きというのではなく、彼女自身のたましいの奥深いところから溢れ出てくるパッションを表出しているに過ぎなかった。
長年付き合ってきた千秋は十分にそのことを理解していた。
だからこそ、こんなにも聴衆をドキドキさせ陶酔させるのだった。
千秋はそれを「のだめの強い音楽」と言った。

華やかなエンディングの幕が下ろされると、爆発的拍手とともに場内総立ちとなった。
「ブラボー！」「ブラーバ！」の声が乱れ飛んだ。
裏軒の親父も顔を湯剥きトマトのように紅潮させ、目に涙を浮かべながら、愛娘を讃えるかのように分厚いその手を激しく叩き続けた。
佐久間も立ち上がり

「エクセレーントッ！！」
と絶叫した。

のだめは千秋と共に、楽屋へ引っ込むと、振り向きざまに千秋に抱きついた。
いつもなら何か戯けるところだが、のだめは黙って千秋の胸に顔を埋ずめていた。
よほど嬉しかったのだろう。万感の思いがのだめをして言葉を失ってしまうほどだった。
千秋もそれを察して、しずかに抱擁し
「よかったな。オレたち…」
とそっと耳元に語りかけた。
そう。それは大川の河原で、後ろから抱擁されて語りかけられたあの日と同じ、千秋の深い愛だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0882l/

私篇　『続・のだめ』　初共演　Ｉ

2010年10月15日21時49分発行